夜叉ヶ池

泉鏡花

青空文庫

場所　越前国大野郡鹿見村琴弾谷
時　現代。――盛夏
人名　萩原晃（鐘楼守）
百合（娘）
山沢学円（文学士）
白雪姫（夜叉ヶ池の主）
湯尾峠の万年姥（眷属）
白男の鯉七
大蟹五郎
木の芽峠の山椿
鯖江太郎
鯖波次郎
虎杖の入道
十三塚の骨
夥多の影法師
黒和尚鯰入（剣ヶ峰の使者）

与十（鹿見村百姓）
その他大勢
鹿見宅膳（神官）
権藤管八（村会議員）
斎田初雄（小学教師）
畑上嘉伝次（村長）
伝吉（博徒）
小烏風呂助（小相撲）
穴隈鉱蔵（県の代議士）

劇中名をいうもの。――（白山剣ヶ峰、千蛇ヶ池の公達）

三国岳の麓の里に、暮六つの鐘きこゆ。――幕を開く。

萩原晃　この時白髪のつくり、鐘楼の上に立ちて夕陽を望みつつあり。鐘楼は柱に蔦からまり、高き石段に苔蒸し、棟には草生ゆ。晃やがて徐に段を下りて、清水に来を磨ぐお百合の背後に行く。

晃　水は、美しい。いつ見ても……美しいな。

百合　ええ。

　その水の岸に菖蒲あり二三輪小さき花咲く。

晃　綺麗な水だよ。（微笑む。）

百合　（白髪の鬢に手を当てて）でも、白いのでございますもの。

晃　そりゃ、米を磨いでいるからさ。……（框の縁に腰を掛く）お勝手働き御苦労、せっかくのお手を水仕事で台なしは恐多い、ちとお手伝いと行こうかな。

百合　可うございますよ。

晃　いや……お手伝いという処だが、お百合さんのそうした処は、咲残った菖蒲を透いて、水に影が映したようでなお綺麗だ。

百合　存じません。

晃　賞めるのに怒る奴がありますか。

百合　おなぶり遊ばすんでございますものを。――そして旦那様は、こんな台所へ出ていらっしゃるものではありません。早くお机の所へおいでなさいまし。

晃　鐘を撞く旦那はおかしい。実は権助と名を替えて、早速お飯にありつきたい。何とも可恐く腹が空いて、今、鐘を撞いた撞木が、杖になれば可いと思った。ところで居催促という形もある。

百合　ほほほ、またお極り。……すぐお夕飯にいたしましょうねえ。

晃　手品じゃあるまいし、磨いでいる米が、飯に早変わりはしそうもないぜ。

百合　まあ、あんな事を――これは翌朝の分を仕掛けておくのでございますよ。

晃　翌朝の分――ああ、お所帯もち、さもあるべき事です。いや、それを聞いて安心したら、がっかりして余計空いた。

百合　何でございますねえ。……お菜も、あの、お好きな鴫焼をして上げますから、おとなしくしていらっしゃいまし。お腹が空いたって、人が聞くと笑います。

晃　（縁を上る）誰に遠慮がいるものか、人が笑うのは、ね、お前。

百合　はい。

晃　お互いに朝寝の時――

百合　知りませんよ。（莞爾俯向く。）

晃　煩く薮蚊が押寄せた。裏縁で燻してやろう。（納戸、背後むきに山を仰ぐ）……雲の峰を

焼落した、三国ヶ岳は火のようだ。西は近江、北は加賀、幽に美濃の山々峰々、数万の松明を列ねたように早の焔で取巻いた。夜叉ヶ池へも映るらしい。ちょうどその水の上あたり、宵の明星の色さえ赤い。……なかなか雨らしい影もないな。

百合　……その竜が棲む、夜叉ヶ池からお池の水が続くと申します。ここの清水も気のせいやら、流が沢山痩せました。このごろは村方で大騒ぎをしています。……暑さは強し……貴方、お身体に触りはしますまいかと、――めしあがりものの不自由な片山里は心細い。私はそれが心配でなりません。

晃　流が細ったって構うものか。お前こそ、その上夏痩せをしないが可い。お百合さん、その夕顔の花に、ちょっと手を触ってみないか。

百合　はい、どういたすのでございますか。

晃　花にも葉にも露があろうね。

百合　ああ冷い。水の手にも涼しいほど、しっとり花が濡れましたよ。

晃　世間の人には金が要ろう、田地も要ろう、雨もなければなるまいが、我々二人活きるには、百日照っても乾きはしない。その、露があれば沢山なんだ。（戸外に向える障子を閉す。）

百合　貴方、お暑うございましょう。開けておおきなさいましても、もう、そちこち人も通りますまい。

晃　何、更って、そんな心配をするものか。……晩方閉込んで一燻し燻しておくと、蚊が大分

楽になるよ。

時に蚊遣の煙なびく、

学円。日に焼けたるパナマ帽子、背広の服、落着のある人体なり。風呂敷包を斜に背い、脚絆草鞋穿、杖づくりの洋傘をついて、鐘楼の下に出づ。打仰ぎ鐘を眺め、

学円　今朝、明六つの橋を渡って、ここで暮六つの鐘を聞いた。……

お百合は笊に米をうつす。

学円　やあ、お精が出ます。（と声を掛く。）

百合　はい。（見向く。）

学円　途中、畷の竹藪の処へ出て……暗くなった処で、今しがた聞きました。時を打ったはこの鐘でしょうな。

百合　さようでございます。

学円　音も尊い！……立派な鐘じゃ。鐘楼へ上ってみても差支えはありませんか。

百合　（笊を抱えて立つ）ええ、大事ございません。けれども貴客、御串戯に、お杖やなんぞでお敲き遊ばしては不可ません。

学円　西瓜を買うのではありません。決して敲いてはみますまい。（笑う。）

百合　御串戯おっしゃいます。……いいえ、悪戯を遊ばすようなお方とは、お見受け申しはしませんけれど、その鐘は、明六つと、暮六つと、夜中丑満に一度、——三度のほかは鳴らさ

ない事になっておりますから、失礼とは存じましたが、ちょっと申上げたのでございます。さあ、どうぞ御遠慮なく、上って御覧なさいまし。（夕顔の垣根について入んとす。）

学円　ああ、ちょっと……お待ち下さい。鐘を見ようと思いますが、ふと言を交わしたを御縁に、余り不躾がましい事じゃが、茶なりと湯なりと、一杯お振舞い下さらんか。

百合　お易い事でございます。さあ、貴客、これへお掛けなさいまし。

学円　御免下さいよ。

百合　真に見苦しゅうございます。

学円　これは――お寺の庫裡とも見受ません。御本堂は離れていますか。

百合　いいえ、もう昔、焼けたと申しまして、以前から、寺はないのでございます。

学円　鐘ばかり……

百合　はい。

学円　鐘ばかり……成程、ところで西瓜の一件じゃ。（帽子を脱ぐ、ほとんど剃髪したるごとき一分刈の額を撫でて）や、西瓜と云えば、内に甜瓜でもありますまいか。――茶店でもない様子――（見廻す。）

片山家の暮れ行く風情、茅屋の低き納戸の障子に灯影映る。

学円　この上、晩飯の御難題は言出しませんが、いかんとも腹が空いた。

百合　ほほ。（と打笑み）筧の下に、梨が冷してござんす、上げましょう。（と夕顔の蔭に立

廻る。）

学円　（がぶがぶと茶を呑み、衣兜から扇子を取って、煽いだのを、と翳して見つつ）おお、咲きました。貴女の顔を見るように。

百合　ええ？（聞返す。）

学円　いや、髪の色を見るように。

百合　もう、年をとりますと、花どころではございません。早く干瓢にでもなりますれば、……とそればかりを待っております。

学円　小刀をこれへお遣わし……私が剥きます。――お世話を掛けてはかえって気遣いな。どれどれ……旅の事欠け、不器用ながら、梨の皮ぐらいは、うまく剥きます。おおお氷よりよく冷えた。玉を削るとはこの事じゃろう。

百合　旅を遊ばす御様子にお見受け申します……貴客は、どれから、どれへお越しなさいますえ？

学円　さて名告りを揚げて、何の峠を越すと云うでもありません。御覧の通り、学校に勤めるもので、暑中休暇に見物学問という処を、遣って歩行く……もっとも、帰途です。――涼しくば木の芽峠、音に聞こえた中の河内か、（廂はずれに山見る眉）峰の茶店に茶汲女が赤前垂というのが事実なら、疱瘡の神の建場でも差支えん。湯の尾峠を越そうとも思います。――落着く前は京都ですわ。

百合　お泊りは？　貴客、今晩の。

学円　ああ、うっかり泊りなぞお聞きなさらぬが可い。言尻に着いて、宿の御無心申さんとも限らんぞ。はははは、いや、串戯じゃ。御心配には及ばんが、何と、その湯の尾峠の茶汲女は、今でも赤前垂じゃろうかね。

百合　山また山の峠の中に、嘘のようにもお思いなさいましょうが、まったくだと申します。

学円　谷の姫百合も緋色に咲けば、何もそれに不思議はない。が、この通り、山ばかり、重り累る、あの、巓を思うにつけて、……夕焼雲が、めらめらと巌に焼込むようにも見える。こりゃ、赤前垂より、雪女郎で凄うても、中の河内が可いかも分らん。何にしろ、暑い事じゃね。——やっとここで呼吸をついた。

百合　里では人死もありますッて……酷い旱でございますもの。

学円　今朝から難行苦行の体で、暑さに八九里悩みましたが——可恐しい事には、水らしい水というのを、ここに来てはじめて見ました。これは清水と見えます。

百合　裏の崖から湧きますのを、筧にうけて落します……細い流でございますが、石に当って、りんりんと佳い音がしますので、この谷を、あの琴弾谷と申します。貴客、それは、おいしい冷い清水。……一杯汲んで差上げましょうか。

学円　何が今まで我慢が出来よう、鐘堂も知らない前に、この美い水を見ると、逆蜻蛉で口をつけて、手で引掴んでがぶがぶと。

百合　まあ、私はどうしましょう、知らずにお米を磨ぎました。

学円　いや、しらげ水は菖蒲の絞、夕顔の花の化粧になったと見えて、下流の水はやっぱり水晶。ささ濁りもしなかった。が、村里一統、飲む水にも困るらしく見受けたに、ここの源まで来ないのは格別、流れを汲取るものもなかったように思う……何ぞ仔細のある事じゃろうか。

百合　あの、湧きますのは、裏の崖でござんすけれど。

学円　はあ、はあ。……

百合　水の源はこの山奥に、夜叉ヶ池と申します。凄い大池がございます。その水底には竜が棲む、そこへ通うと云いまして——毒があると可恐がります。——もう薄暗くて見えますまいけれども、その貴客、流の石には、水がかかって、紫だの、緑だの、口紅ほどな小粒も交って、それは綺麗でございますのを、お池の主の眷属の鱗がこぼれたなんのッて、気味が悪いと申すんでございますから。……

学円　綺麗な石が毒蛇の鱗？　や、がぶがぶと、豪いことを遣ってしもうた。（と扇子をもって胸を打つ。）

百合　まあ、（と微笑み）私どもがこの年まで朝夕飲んで何ともない、それをあの、人は疑うのでございます。

学円　もっとも、もっとも。ものを疑うのは人間の習いですよ。私は今のお言で、決して心配

はしますまい。現に朝夕飲んでおらるる、――この年紀まで――（と打ち瞻り）お幾歳じゃな。

百合　……

学円　まあさ、失礼じゃが、お幾歳です？

百合　御免なさいまし、……忘れました。……

学円　ははは、俚言にも、婦人に対して、貴女はいつ死ぬとは問うても可い。が、いつ生れた、とは聞くな――とある。これは無遠慮に出過ぎました。……お幾歳じゃと年紀は尋ねますまい。時に幾干ですか。

百合　幾干かとおっしゃって？

学円　代価じゃ。

百合　あの、お代、何の？……お宝……ま、滅相な。お茶代なぞ頂くのではないのでござんす。

学円　茶も茶じゃが、いやあこれは、髭のようにもじゃもじゃと聞えておかしい。茶も勿論、梨を十分に頂いた。お商売でのうても無代価では心苦しい。ずばりと余計なら黙っても差置きますが、旅空なり、御覧の通りの風体。ちゃんと云うて取って下さい。

百合　そうまでお気が済みませんなら、少々お代を頂きましょうか。

学円　勿論ともな。

百合　でも、あの、お代とさえ申しますもの、お宝には限りません。そのかわり、短いのでも

可うござんす、お談話を一つ、お聞かせなすって下さいましな。

学円　談話をせい、……談話とは？

百合　方々旅を遊ばした、面白い、珍しい、お話しでございます。

学円　その談話を？

百合　はい、お代のかわりに頂きます。貴客には限りませず、薬売の衆、行者、巡礼、この村里の人たちにも、お聞に合うものがございんして、そのお代をと云う方には、誰方にも、お談話を一条ずつ伺います。沢山お聞かせ下さいますと、お泊め申しもするのでござんす。

学円　むむ、これこそ談話じゃ。（と小膝を拍て）面白い。話しましょう。……が、さて談話というて、差当り——お茶代になるのじゃからって、長崎から強飯でもあるまいな。や、思出した。しかもこの越前じゃ。

晃　（細く障子を開き差覗く。）

時に小机に向いたり。双紙を開き、筆を取りて、客の物語る所をかき取らんとしたるなるが、学円と双方、ふと顔を合せて、何とかしけん、燈火をふっと消す。

百合　どんなお話、もし、貴客。

学円　……時にここで話すのを、貴女のほかに聞く人がありますかね。

百合　いいえ、外にはお月様ばかりでござんす。

学円　道理こそ燈が消えて、ああ、蚊遣の煙で、よくは見えぬが、……納戸に月が射すらしい。

――お待ちなさい。今、言いかけた越前の話というのは、縁の下で牡丹餅が化けたのです。たとえば、ここで私がものを云うと、その通り、縁の下で口真似をする奴がある。村中が寄って集って、口真似するは何ものじゃ。狐か、と聞くと、違う。と答える。狸か、違う、獺か、違う、魔か、天狗か、違う、違う。……しまいに牡丹餅か、と尋ねた時、おうと云って消え失せたという――その話をする気であったが、……まだ外に、月が聞くと言わるるから、出直して、別の談話をする気になった。お聞きなさい。これは現在一昨年の夏――

一人、私の親友に、何かかねて志す……国々に伝わった面白い、また異った、不思議な物語を集めてみたい。日本中残らずとは思うが、この夏は、山深い北国筋の、谷を渡り、峰を伝って尋ねよう、と夏休みに東京を出ました。――それっきり、行方が知れず、音沙汰なし。親兄弟もある人物、出来る限り、手を尽くして捜したが、皆目跡形が分らんから、われわれ友だちの間にも、最早や世にない、死んだものと断念めて、都を出た日を命日にする始末。いや、一時は新聞沙汰、世間で豪い騒ぎをした。……

自殺か、怪我か、変死かと、果敢ない事に、寄ると触ると、袂を絞って言い交わすぞ！　あとを隠すにも、死ぬのにも、何の理由もない男じゃに、貴女、世間には変った事がありましょうな。……

百合　ああ、貴客、貴客、難有う存じます。……ほんとうに難有う存じました。（とにべなく言う。）

学円　そんなに礼を云うて、茶代のかわりになるのですかい。

百合　もう沢山でございます。

学円　それでは面白かったのじゃね。

百合　……おもしろいのは、前の牡丹餅の化けた方、あとのは沢山でございます。

学円　さて談話はこれからなんじゃ、今のはほんの前提ですが。

百合　どうぞ、……結構でございますから、……そして貴客、もう暗くなります、お宿をお取り遊ばすにも御不自由でございましょうから。……

学円　いやいや、談話の模様では、宿をする事もあると言われた。私も一つ泊めて下さい、――この談話は実がありますから。

百合　先刻は、貴客、女の口から泊りの事なぞ聞くんじゃない。……その言について、宿の無心でもされたらどうするとおっしゃって。……もう、清い涼しいお方だと思いましたものを、……女ばかり居る処で、宿貸せなぞと、そんな事、……もう、私は気味が悪い。

学円　気味が悪いな？　牡丹餅の化けたのではないですが。

百合　こんな山家は、お化より、都の人が可恐うございます、……さ、貴客どうぞ。

学円　これは、押出されるは酷い。（不承々々に立つ。）

百合　（続いて出で、押遣るばかりに）どうぞ、お立ち下さいまし。

学円　婦人ばかりじゃ、ともこうも言われぬか。鉢の木ではないのじゃが、蚊に焚く柴もある

ものを、……常世の宿なら、こう情なくは扱うまい。……雪の降らぬがせめてもじゃ。

百合　真夏土用の百日旱に、たとい雪が降ろうとも、……（と立ちながら、納戸の方を熟と視て、学円に瞳を返す。）御機嫌よう。

学円　失礼します。

晃　（衝と蚊遣の中に姿を顕し）山沢、山沢。（ときっぱり呼ぶ。）

学円　おい、萩原、萩原か。

百合　あれ、貴方。（と走り寄って、出足を留めるように、膝を突き手に晃の胸を圧える。）

晃　帰りやしない、大丈夫、大丈夫。（と低声に云って）何とも言いようがない、山沢、まあ——まあ、こちらへ。

学円　私も何とも言いようが無い。十に九ツ君だろうと、今ね、顔を見た時、また先刻からの様子でもそう思うた、けれども、余り思掛けなし——（引返して框に来り）第一、その頭はどうしたい。

晃　頭もどうかしていると思って、まあ、許して上ってくれ。

学円　埃ばかりじゃ、失敬するぞ、（と足を拭いたなりで座に入る）いや、その頭も頭じゃが、白髪はどうじゃ、白髪はよ?……

晃　これか、谷底に棲めばといって、大蛇に呑まれた次第ではない、こいつは仮髪だ。（脱いで棄てる。）

学円　ははあ……（とお百合を密と見て）勿論じゃな、その何も……

晃　こりゃ、百合と云う。

お百合、座に直った晃の膝に、そのまま俯伏して縋っている。

学円　お百合さんか。細君も……何、奥方も……

晃　泣く奴があるか、涙を拭いて、整然として、御挨拶しな。

と言ううちに、極り悪そうに、お百合は衝と納戸へかくれる。

晃　君に背中を敲かれて、僕の夢が覚めた処で、東京に帰るかって憂慮いなんです。

学円　（お百合の優しさに、涙もろく、ほろりとしながら）いや、私の顔を見たぐらいで、萩原――この夢は覚めんじゃろう。……何、いい夢なら、あえて覚めるには及ばんのじゃ……しかし萩原、夢の裡にも忘れまいが、東京の君の内では親御はじめ、

晃　むむ。

学円　君の事で、多少、それは、寿命は縮められたか分らんが、皆まず御無事じゃ。

晃　ああ、そうか。難有い。

学円　私に礼には及ばない。

晃　実に済まん！

学円　さてこれはどうしたわけじゃ。

晃　夢だと思って聞いてくれ。

学円　勿論、夢だと思うておる。……

晃　委しい事は、夜すがらにも話すとして、知ってる通り……僕は、それ諸国の物語を聞こうと思って、北国筋を歩行いたんだ。ところが、自身……僕、そのものが一条の物語になった訳だ。——魔法つかいは山を取って海に移す、人間を樹にもする、石にもする、石を取って木の葉にもする。木の葉を蛙にもするという、……君もここへ来たばかりで、もの語の中の人になったろう……僕はもう一層、その上を、物語、そのものになったんだ。

学円　薄気味の悪い事を云うな。では、君の細君は、……（云いつつ憚る。）

晃　（納戸を振向く）衣服でも着換えるか、髪など撫つけているだろう。……襖一重だから、背戸へ出た。……

学円　（伸上り納戸越に透かして見て）おい、水があるか、蘆の葉の前に、櫛にも月の光が射して、仮髪をはずした髪の艶、雪国と聞くせいか、まだ消残って白いように、襟脚、脊筋も透通る。……凄いまで美しいが、……何か、細君は魔法つかいか。

晃　可哀想な事を言え、まさか。

学円　ふん。

晃　この土地、この里——この琴弾谷が、一個の魔法つかいだと云うんだよ。——

山沢、君は、この山奥の、夜叉ヶ池というのを聞いたか。

学円　聞いた。しかもその池を見ようと思って、今庄駅から五里ばかり、わざわざここまで

入込んだのじゃ。

晃　僕も一昨年、その池を見ようと思って、ただ一人、この谷へ入ったために、こういう次第になったんだ。――ここに鐘がある――

学円　ある！　何か、明六つ、暮六つ……丑満、と一昼夜に三度鳴らす。その他は一切音をさせない定じゃと聞いたが。

晃　そうだよ。定として、他は一切音をさせてはならない、と一所にな、一日一夜に三度ずつは必ず鳴らさねばならないんだ。

学円　それは？

晃　ここに伝説がある。昔、人と水と戦って、この里の滅びようとした時、越の大徳泰澄が行力で、竜神をその夜叉ヶ池に封込んだ。竜神の言うには、人の溺れ、地の沈むを救うために、自由を奪わるるは、是非に及ばん。そのかわりに鐘を鋳て、麓に掛けて、昼夜に三度ずつ撞鳴らして、我を驚かし、その約束を思出させよ。……我が性は自由を想う。自在を欲する。気ままを望む。ともすれば、誓を忘れて、狭き池の水をして北陸七道に漲らそうとする。我が自由のためには、世の人畜の生命など、ものの数ともするものでない。が、約束は違えぬ、誓は破らん――但しその約束、その誓を忘れさせまい。思出させようとするために、鐘を撞く事を怠るな。――山沢、そのために鋳た鐘なんだよ。だから一度でも忘れると、たちどころに、大雨、大雷、大風とともに、夜叉ヶ池から津浪が起って、村も里も水の底に葬

って、竜神は想うままに天地を馳すると……こう、この土地で言伝える。……そのために、明六つ、暮六つ、丑満つ鐘を撞く。……

学円　（乗出でて）面白い。

晃　いや、面白いでは済まない、大切な事です。

学円　いかにも大切な事じゃ。

晃　ところで、その鐘を撞く、鐘撞き男を誰だと思う。

学円　君か。

晃　僕だよ。すなわち萩原晃がその鐘撞夫なんだよ。

学円　はてな。

晃　ここに小屋がある……

学円　むむ。

晃　鐘撞が住む小屋で、一昨年の夏、私が来て、代るまでは、弥太兵衛と云う七十九になる爺様が一人居て、これは五十年以来、いかな一日も欠かす事なく、一昼夜に三度ずつこの鐘を打っていた。

山沢、花は人の目を誘う、水は人の心を引く。君も夜叉ヶ池を見に来たと云う。私がやっぱり、池を見ようと、この里へ来た時、暮六つの鐘が鳴ったんだ。弥太兵衛爺に、鐘の所謂を聞きながら、夜があけたら池まで案内させる約束で、小屋へ泊めて貰った処。

その夜、丑満の鐘を撞いて、鐘楼の高い段から下りると、爺は、この縁前で打倒れた——急病だ。死ぬ苦悩をしながら、死切れないと云って、悶える。——こうした世間だ、もう以前から、村一統鐘の信心が消えている。……爺が死んだら、誰も鐘を鳴らすものがない。一度でも忘れると、掌をめぐらさず、田地田畠、陸は水になる、沼になる、淵になる。幾万、何千の人の生命——それを思うと死ぬるも死切れぬと、呻吟いて掻く。——虫より細い声だけれども、五十年の明暮を、一生懸命、そうした信仰で鐘楼を守り通した、骨と皮ばかりの爺が云うのだ。……鐘の自から鳴るごとく、僕の耳に響いた。……且は臨終の苦患の可哀さに、安心をさせようと、——心配をするな親仁、鐘は俺が撞いてやる、——とはっきり云うと、世にも嬉しそうに、ニヤニヤと笑って、拝みながら死んだ。その時の顔を今に忘れん。が、まさか、一生、ここに鐘を撞いて終ろうとは思わなかった。丑満は爺が済ました、明六つの鐘一度ばかり、代って撞くぐらいにしか考えなかった。が、まあ、爺が死ぬ、村のものを呼ぼうにも、この通り隣家に遠い。三度の掟でその外は、火にも水にも鐘を撞くことはならないだろう。

学円　その鳴らしてならないというは、どうした次第じゃね？

晃　鐘は、高く、ここにあって——その影は、深く夜叉ヶ池の碧潭に映ると云う。……撞木を当てて鳴る時は、凩にすら、そよりとも動かない、その池の水が、さらさらと波を立てると聞く。元来、竜神を驚かすために打鳴らすのであるから、三度のほかに騒がしては、礼を欠

く事に当る。……

学円　その道理じゃ、むむ。

晃　鐘も鳴らせん……処で、不知案内の村を駈廻って人を集めた、――サア、弥太兵衛の始末は着いたが、誰も承合って鐘を撞こうと言わない。第一、しかじかであるからと、爺に聞いた伝説を、先祖の遺言のように厳に言って聞かせると、村のものは哄と笑う。……若いものは無理もない。老寄どもも老寄どもなり、寺の和尚までけろりとして、昔話なら、桃太郎の宝を取って帰った方が結構でござる、と言う。癪に障った――勝手にしろ、と私もそこから、（と框を指し）草鞋を穿いて、すたすたとこの谷を出て帰ったんだ。帰る時、鹿見村のはずれの土橋の袂に、榎の樹の下に立ってしょんぼりと見送ったのが、（と調子を低く）あの、婦人だ。

その日の、明六つの鐘さえ、学校通いの小児をはじめ、指しをして笑う上で、私が撞いた。この様子では、最早や今日から、暮六つの鐘は鳴るまいな！……

もしや、岩抜け、山津浪、そうでもない、大暴風雨で、村の滅びる事があったら、打明けた処……他は構わん、……この娘の生命もあるまい――待て、二三日、鐘堂を俺が守ろう。その内には、とまた四五日、半月、一月を経るうちに、早いものよ、足掛け三年。――君に逢うまで、それさえ忘れた。……また、忘れるために、その上、年に老朽ちて世を離れた、と自分でも断念のため。……ばかりじゃ無い、……雁、燕の行きかえり、軒なり、空なり、

行交う目を、ちょっとは紛らす事もあろうと、昼間は白髪の仮髪を被る。

学円　（黙然として顔を見る。）

晃　（言葉途絶える）そう顔を見るな、恥入った。

学円　（しばらく、打案じ）すると、あの、……お百合さんじゃ、その人のために、ここに隠れる気になったと云うのじゃ。

晃　……ますます恥入る。

学円　いや、恥ずるには及ばん。が、どうじゃ、細君を連れて東京に帰るわけには行かんのかい。

晃　何も三ヶ国と言わん。越前一ヶ国とも言わん。われわれ二人が見棄てて去って、この村と、里と、麓に棲むものの生命をどうする。

学円　萩原、（と呼びつつ、寄り）で、君はそれを信ずるかい。

晃　信ずる、信ずるようになった。萩原晃はいざ知らん、越前国三国ヶ岳の麓、鹿見村琴弾谷の鐘楼守、百合の夫の二代の弥太兵衛は確に信じる。

学円　（ひたりと洋服の胡坐に手をおき）何にも言わん。そう信ぜい。堅く進ぜい。奥方の人を離れた美しさを見るにつけても、天がこの村のために、お百合さんを造り置いて、鐘楼守を、ここに据えられたものかも知れん。君たち二人は二柱の村の神じゃ。就中、お百合さんは女神じゃな。

百合　（行燈を手に黒髪美しく立出づる）私、どうしたら可うございましょう。
学円　や、これは……
百合　貴客、今ほどは。
学円　さて、お初に……はははは、奥さん。
百合　まあ。……（と恥らう。）
晃　これ、まあ……ではない、よく御挨拶申しな、兄とおなじ人だ。
百合　（黙って手をつく。）
学円　はいはい。いや、御挨拶はもう済みました。貴女嘘は出ませなんだか。
晃　うっかり嘘なんぞすると、蚊が飛出す。
百合　あれ、沢山おなぶんなさいまし。
晃　そんなに、お前、白粉を粧けて。
百合　あんな事ばかりおっしゃる。（と優しく睨んで顔を隠す。）
学円　何にしろ、お睦じい……はははは、勝手にお噂をしましたが、何は、お里方、親御、御兄弟は？
晃　山沢、何にもない孤児なんだ。鎮守の八幡の宮の神官の一人娘で、その神官の父親さんも亡くなった。叔父があって、それが今、神官の代理をしている。……これの前だが、叔父というのは、了簡のよくない人でな。

学円　それはそれは。

晃　姪のこれを、附けつ廻しつしたという大難ぶつです。

百合　ほんとうに、たよりのない身体でございます。何にも存じません、不束ものでございますけれど、貴客、どうぞ御ふびんをお懸けなすって下さいまし。（しんみりと学円に向って三指して云う。）

学円　（引き入れられて、思わず涙ぐむ。）御殊勝ですな。他人のようには思いません。

晃　（同じく何となく胸せまる。涙を払って）さあさあ、親類というお言葉なんだ。遠慮のない処、何にも要らん。御吹聴の鳴焼で一杯つけな。これからゆっくり話すんだ。山沢、野菜は食わしたいぜ、そりゃ、甘いぞ。

学円　奥方、お立ちなさるな。トそこでじゃな、萩原、私は志した通り、これから夜を掛けて夜叉ヶ池を見に行く気じゃ。種々不思議な話を聞いたら、なお一層見たくなった。御飯はお手料理で御馳走になろうが、お杯には及ばん、第一、知ってる通り、一滴も飲めやせん。

晃　成程、そうか、夜叉ヶ池を見に来たんだ。……明日にしては、と云うんだけれども、道は一里余り、が、上りが嶮しい。この暑さでは夜が可い。しかし、四五日は帰さんから、明日の晩にしてくれないかい。

学円　いや、学校がある。これでも学生の方ではないから勝手に休めん。第一、遊び過ぎて、もう切詰めじゃ。

晃　それは困った、学校は？……先刻、落着く先は京都だと云ったようだな。
学円　むむ、去年から。……みやづかえの情なさじゃ。何しろ、急ぐ。
晃　分った、では案内かたがた一所に行く。
学円　君も。
晃　……直ぐに出掛けよう。
学円　それだと、奥方に済まんぞ。
晃　何を詰らない。
百合　いいえ……（と云いしがしおしおと）貴方、直ぐにとおっしゃって、……お支度は、……
晃　土橋の煮染屋で竹の皮づつみと遣らかす、その方が早手廻だ。鰊の煮びたし、焼どうふ、可かろう、山沢。
学円　結構じゃ。
晃　事が決れば早いが可い。源佐衛門は草履で可し、最明時どのは、お草鞋、お草鞋。
学円　やあ、おもしろい。奥さん、いずれ帰途には寄せて頂く。私は味噌汁が大好きです。小菜を入れて食べさして発せて下さい。時に、帰途はいつになろう。……
晃　さあ、夜が短い。明方になろうも知れん。
学円　明けがた……は可いが、（と草鞋を穿きながら）待て待て、一所に気軽に飛出して、今

夜、丑満つの鐘はどうするのじゃ。

晃　百合が心得ておる。先代弥太兵衛と違う。仙人ではない、生身の人間。病気もする、百合が時々代るんだよ。

学円　では、池のあたりで聞きましょう。――奥方しっかり願います。

百合　はい、内をお忘れなさいませんように、私は一生懸命に。（と涙声にて云う。）

晃　……おい、あの、弥太兵衛が譲りの、お家の重宝と云う瓢箪を出したり、酒を買う。――それから鎌を貸しな、滅多に人の通わぬ処、路はあっても熊笹ぐらいは切らざあなるまい。……早くおし。

百合　はい、はい。

学円　やあ、どぎどぎと鋭いな。（と鎌を見る。）

晃　月影に……（空へかざす）なお光るんだ。これでも鎌を研ぐことを覚えたぜ。――こっちだ、こっちだ。（と先へ立つ。）

百合　お気をつけ遊ばせよ。（とうるみ声にて、送り出づる時、可愛き人形袖にあり。）

晃　何だい、こんなもの。（見返る。）

百合　太郎がちょっとお見送り。（と袖でしめつつ）小父ちゃんもお早くお帰りなさいまし、坊やが寂しゅうございます。（と云いながら、学円の顔をみまもり、小家の内を指し、うつむいてほろりとする。）

学円　（庇う状に手を挙げて、また涙ぐみ）御道理じゃ、が、大丈夫、夢にも、そんな事が、貴女、（と云って晃に向きかえ）私に逢うて、里心が出て、君がこれなり帰るまいか、という御心配じゃ。

百合　（きまりわるげに、つと背向になる。）

晃　ああ、それで先刻から……馬鹿、嬰児だな。

学円　何かい、ちょっと出懸に、キスなどせんでも可いかい。

晃　旦那方じゃあるまいし、鐘撞弥太兵衛でがんすての。

と両人連立ち行く。

百合　（熟としばし）まさかと思うけれど、ねえ、坊や、大丈夫お帰んなさるわねえ。おおおお目ン目を瞑って、頷いて、まあ、可愛い。（と頬摺りし）坊やは、お乳をおあがりよ。母さんは一人でお夕飯も欲しくない。早く片附けてお留守をしましょう。一人だと見て取ると、村の人が煩いから、月は可し、灯を消して戸をしめて。――

と框にずッと雨戸を閉める。閉め果てると、戸の鍵がガチリと下りる。やがて、納戸の燈、はっと消ゆ。

出る化ものの数々は、一ツ目、見越、河太郎、獺に、海坊主、天守におさかべ、化猫は赤手拭、篠田に葛の葉、野干平、古狸の腹鼓、ポコポン、ポコポン、コリャ、ポンポコポン、笛に雨を呼び、酒買小僧、鉄漿着女の、けたけた笑、里の男は、のっぺらぼう。

と唄――

与十、竹の小笠を仰向けに、鯉を一尾、嬉しそうな顔して見て、ニヤニヤと笑って出づ。

与十　大い事をしたぞ。へい、雪さ豊年の兆だちゅう、旱は魚の当りだんべい。大沼小沼が干たせいか、じょんじょろ水に、びちゃびちゃと泳いだ処を、ちょろりと掬った。……（鯉跳ねる）わい！　銀の鱗だ。ずずんと重い。四貫目あるべい。村長様が、大囲炉裡の自在竹に掛った滝登りより、えッと大え。こりゃ己がで食おうより、村会議員の髯どのに売るべいわさ。やれ、鯉。髯どのに身売をしろじゃ。値になれ、値になれ。（鯉跳ねる）ふあ、銀の鱗だ。金が光る――光るてえば、鱗てえば、ここな、（と小屋を見て）鐘撞先生が打ってしめた、神官様の嬢様さあ、お宮の住居にござった時分は、背中に八枚鱗が生えた蛇体だと云っけえな。……そんではい、夜さり、夜ばいものが、寝床を覗くと、いつでもへい、白蛇の長いのが、嬢様のめぐり廻って、のたくるちッて、現に、はい、目のくり球廻らかいて火を吹いた奴さえあっけえ。……

鐘撞先生には何事もねえと見えるだ。まんだ、丈夫に活きてござって、執殺されもさっしゃらねえ。見ろやい、取っても着けねえ処に、銀の鱗さ、ぴかぴかと月に光るちッて、汝がを、（と鯉をじろじろ）ばけものか蛇体と想うて、手を出さずば、うまい酒にもありつけぬ処だったちゅうものだ。――嬢様が手本だよ。はってな、今時分、真暗だ。舐殺されはしねえだかん、待ちろ。（と抜足で寄って、小屋の戸の隙間を覗く。）

蟹五郎。朱顔、蓬なる赤毛頭、緋の衣したる山伏の扮装。山牛蒡の葉にて捲いたる煙草を、シャと横銜えに、ぱっぱっと煙を噴きながら、両腕を頭上に突張り、卜鋏を極込み、蹌んで横這に、ずかりずかりと歩行き寄って、与十の潜見する向脛を、かっきと挟んで引く。

与十　痛え。（と叫んで）わっ、（と反る時、鯉ぐるみ竹の小笠を夕顔の蔭に投ぐ。）ひゃあ、藪沢の大蟹だ。人殺し！

と怪し飛んで遁ぐ。――蟹五郎すかりすかりと横に追う。

鯉七。鯉の精。夕顔の蔭より、するすると顕る。黒白鱗の帷子、同じ鱗形の裁着、鰭のごときひらひら足袋。件の竹の小笠に、面を蔽いながら来り、はたとその小笠を擲つ。顔白く、口のまわり、べたりと髯黒し。蟹、これを見て引返す。

鯉七　（ばくばくと口を開けて、はっと溜息し）ああ、人間が旱の切なさを、今にして思当った。某が水離れしたと同然と見える。……おお、大蟹、今ほどはお助け嬉しい、難有かったぞ。

蟹五郎　水心、魚心だ、その礼に及ぼうかい。また、だが、滝登りもするものが、何じゃとて、笠の台に乗せられた。

鯉七　里へ出る近道してな、無理な流を抜けたと思え。石に鰭が躓いて、膚捌のならぬ処を、ばッさりと啖った奴よ。

蟹五郎　こいつにか。（と落ちたる笠を挟んで圧える。）

鯉七　鬼若丸以来という、難儀に逢わせた。百姓めが、汝。（と笠を蹈む。）

笠　己じゃねえ、己じゃねえ。（と、声ばかりして蔭にて叫ぶ。）

鯉七　はあ、いかさま汝のせいでもあるまい。助けてやろう――そりゃ行け。やい、稲が実ったら案山子になれ！

と放す。しかけにて、竹の小笠はたはたと煽って遁げる。

ははは飛ぶわ飛ぶわ、南瓜畠へ潜って候。

蟹五郎　人間の首が飛んだ状だな、気味助、気味助。かッかッかッ。（と笑い）鯉七、これからどこへ行く。

鯉七　むう、ちと里方へ用がある。ところで滝を下って来た。何が、この頃の旱で、やれ雨が欲しい、それ水をくれろ、と百姓どもが、姫様のお住居、夜叉ヶ池のほとりへ五月蠅きほどに集って来せる。それはまだ可い。が、何の禁厭か知れぬまで、鉄釘、鉄火箸、錆刀や、破鍋の尻まで持込むわ。まだしもよ。お供物だと血迷っての、犬の首、猫の頭、目を剥き、髯を動かし、舌をべらべら吐く奴を供えるわ。胡瓜ならば日野川の河童が噛ろう、もっての外な、汚穢うて汚穢うて、お腰元たちが掃除をするに手が懸って迷惑だ。

ところで、姫様のお乳母どの、湯尾峠の万年姥が、某へ内意＝＝降らぬ雨なら降るまでは降らぬ、向後汚いものなど撒散らすにおいてはその分に置かぬ＝＝と里へ出て触れい、とある。ためにの、この鰭を煩わす、厄介な人間どもよ。

蟹五郎　その事かい、御苦労、御苦労。ところで、大池の姫様には、なかなか雨を下さる思召は当分ないかい。

鯉七　分らんの。早は何も、姫様御存じの事ではない。第一、其許なども知る通りよ。姫様は、それ、御縁者、白山の剣ヶ峰千蛇ヶ池の若旦那にあこがれて、恋し、恋しと、そればかり思詰めてましますもの、人間の旱なんぞ構っている暇があるものかッてい。

蟹五郎　神通広大――俺をはじめ考えるぞ。さまで思悩んでおいでなさらず、両袖で飜然と飛んで、疾く剣ヶ峰へおいでなさるが可いではないか。

鯉七　そこだの、姫様が座をお移し遊ばすと、それ、たちどころに可恐しい大津波が起って、この村里は、人も、馬も、水の底へ沈んでしまう……

蟹五郎　何が、何が、第一俺が住居も広うなる……村が泥沼になるを、何が遠慮だ。勧めろ、勧めろ。

鯉七　忘れたか、鐘がここにある。……御先祖以来、人間との堅い約束、夜昼三度、打つ鐘を、彼奴等が忘れぬ中は、村は滅びぬ天地の誓盟。姫様にも随意にならぬ。さればこそ、御鬱懐、その御ふびんさ、おいとしさを忘れたの。

蟹五郎　南無三宝、堂の下で誓を忘れて、鐘の影を踏もうとした。が、山も田圃も晃々とした月夜だ。まだまだしめった灰も降らぬとなると、俺も沢を出て、山の池、御殿の長屋へ行かずばなるまい。同道を頼むぞ、鯉。

鯉七　むむ、その儀は、ぱくりと合点んだ。かわりにはの、道が寂しい……里へは、きこう同道せい。

蟹五郎　帰途はお池へ伴侶だ。

鯉七　月の啜を、唄うて行こうよ。

蟹五郎　何と唄う？

鯉七　＝＝山を川にしょう＝＝と唄おうよ。

蟹五郎　面白い。

と同音に、鯉はふらふらと袖を動かし、蟹は、ぱッぱッと煙を吹いて、＝＝山を川にしょう、山を川にしょう＝＝と同音に唄い行く。行掛けて淀み、行途を望む。

鯉七　待て、見馴れぬものが、何やら田の畝を伝うて来る。

蟹五郎　かッかッ、怪しいものだ。小蔭れて様子を見んかい。

両個、姿を隠す。

百合　（人形を抱き、媚かしき風情にて戸を開き戸外に出づ。）夜の長い事、長い事……何の夏が明易かろう。坊やも寝られないねえ、――お月様幾つ、お十三、七つ――今も誰やら唄うて通ったのをお聞きかい、――山を川にしょ――ああ、この頃では村の人が、山を川にもしたかろう、お気の毒だわねえ。……まあ、良い月夜、峰の草も見えるような。晃さん、お客様の影も、あの、松のあたりに見えようも知れないから、鐘堂へ上りましょうね。……ひ

よっとかして、袖でも触って鳴ると悪いね、田圃の広場へ出て見ようよ。（と小屋のうらに廻って入る。）

鯰入　花道より、濃い鼠すかしの頭巾、面一面に黒し。白き二根の髯、鼻下より左右にわかれて長く裾まで垂る。墨染の法衣を絡い、鰭の形したる鼠の足袋。一本の蘆を杖つき、片手に緋総結びたる、美しき文箱を捧げて、ふらふらと出で来る。

鯰入　遥々と参った。……もっての外の旱魃なれば、思うたより道中難儀じゃ。（と遥に仰いで）はあ、争われぬ、峰の空に水気が立つ。嬉しや、……夜叉ヶ池は、あれに近い。（と辿り寄る。）

鯉、蟹、前途に立顕る。

鯉七　誰だ。これへ来たは何ものだ。

蟹五郎　お山の池の一の関、藪沢の関守が控えた。名のって通れ。

鯰入　（杖を袖にまき熟と視て）さては縁のない衆生でないの。……これは、北陸道無双の霊山、白山、剣ヶ峰千蛇ヶ池の御公達より、当国、三国ヶ岳夜叉ヶ池の姫君へ、文づかいに参るものじゃ。

鯉七　おお、聞及んだ黒和尚。

蟹五郎　鯰入は御坊かい。

鯰入　これは、いずれも姫君のお身内な。夜叉ヶ池の御眷属か。よい所で出会いました、案内

を頼みましょう。

蟹五郎　お使、御苦労です。

鯉七　ちと申つかった事があって、里へ参る路ではあれども、若君のお使、何は措いてもお供しょう。姫様、お喜びの顔が目に見える。われらもお庇で面目を施します、さあ、御坊。

蟹五郎　さあ、御坊。

鯰入　（ふと、くなくなとなって得進まず。）しばらく。まず、しばらく。……

鯉七　御坊、お草臥れなら、手を取りましょう。

蟹五郎　何と腰を押そうかい。

鯰入　いやいや疲れはしませぬ。尾鰭はのらのらと跳ねるなれども、ここに、ふと、世にも気懸りが出来たじゃまで。

鯉七　気懸りとは？　御坊。

鯰入　ここまで辿って、いざ、お池へ参ると思えば、急にこの文箱が、身にこたえて、ずんと重うなった。その事じゃ。

鯉七　恋の重荷と言いますの。お心入れの御状なれば、池に近し、御双方お気が通って、自然と文箱に籠りましたか。

蟹五郎　またかい。姫様から、御坊へお引出ものなさる。……あの、黄金白銀、米、粟の湧こぼれる、石臼の重量が響きますかい。

鯰入　（悄然として）いや、私が身に応えた処は、こりゃ虫が知らすと見えました。御褒美に遣わさるる石臼なれば可けれども＝＝この坊主を輪切りにして、スッポン煮を賞翫あれ、姫、お昼寝の御目覚ましに＝＝と記してあろうも計られぬ。わあ、可恐しや。（とわなわなと蘆の杖とともにふるい出す。）

鯉七　何でまた、そのような飛んだ事を？　御坊。……

鯰入　いやいや、急に文箱の重いにつけて、ふと思い出いた私が身の罪科がござる。さて、言い兼ねましたが打開けて恥を申そう。（と頸をすくめて、頭を撫で）……近頃、此方衆の前ながら、館、剣ヶ峰千蛇ヶ池へ――熊に乗って、黒髪を洗いに来た山女の年増がござった。裸身の色の白さに、つい、とろとろとなって、面目なや、ぬらり、くらりと鰭を滑らかいてまつわりましたが、フトお目触りとなって、われら若君、もっての外の御機嫌じゃ。――処をこの度の文づかい、泥に潜った閉門中、ただおおせつけの嬉しさに、うかうかと出て参ったが、心付けば、早や鰭の下がくすぽったい。（とまた震う。）

蟹五郎　かッ、かッ、かッ、（と笑い）御坊、おまめです。あやかりたい。

鯰入　笑われますか、情ない。生命とまでは無うても、鰭、尾を放て、髯を抜け、とほどには、おふみに遊ばされたに相違はござるまい。……これは一期じゃ、何としよう。（と寂しく泣く。）

鯉、蟹、これを見て囁き、頷く。

鯉七　いや、御坊、無い事とも言われませぬ。昔も近江街道を通る馬士が、橋の上に立った見も知らぬ婦から、十里前の一里塚の松の下の婦へ、と手紙を一通ことづかりし事あり。途中気懸りになって、密とその封じ目を切って見たれば、＝＝妹御へ、一、この馬士の腸一組参らせ候＝＝としたためられた――何も知らずに渡そうものなら、腹を割かるる処であったの。

鯰入　はあ、（とどうと尻餅つく。）

蟹五郎　お笑止だ。かッかッかッ。

鯉七　幸い、五郎が鋏を持ちます……密と封を切って、御覧が可かろう。

鯰入　やあ、何と、……それを頼みたいばッかりに恥を曝した世迷言じゃ。……嬉しや、大目に見て下さるかのう。

蟹五郎　もっとも、もっとも。

鯉七　また……（と声を密めて）恋し床しのお文なれば、そりゃ、われわれどもがなお見たい。

鯰入　（わななきながら、文箱を押頂き、紐を解く。）

　鯉、蟹ひしと寄る。蓋を放って斉しく見る。

鯰入　やあ！

鯉七　えええええ。

蟹五郎　やあやあやあ！

鯰入　文箱の中は水ばかりよ。

と云う時、さっと、清き水流れ溢る。

鯉七　あれあれあれ、姫様が。

はっと鯰入とともに泳ぐ形に腹ばいになる。蟹は跪いて手を支う。――迫上にて――

夜叉ヶ池の白雪姫。雪なす羅、水色の地に紅の焔を染めたる襲衣、黒漆に銀泥、鱗の帯、下締なし、裳をすらりと、黒髪長く、丈に余る。銀の靴をはき、帯腰に玉のごとく光輝く鉄杖をはさみ持てり。両手にひろげし玉章を颯と繰落して、地摺に取る。

右に、湯尾峠の万年姥。針のごとき白髪、朽葉色の帷子、赤前垂。

左に、腰元、木の芽峠の奥山椿、萌黄の紋付、文金の高髷に緋の乙女椿の花を挿す。両方に手を支いて附添う。

十五夜の月出づ。

白雪　ふみを読むのに、月の明は、もどかしいな。

姥　御前様、お身体の光りで御覧ずるが可うござります。

白雪　（下襲を引いて、袖口の炎を翳し、やがて読果てて恍惚となる。）

椿　姫様。

姥　もし、御前様。

白雪　可懐しい、優しい、嬉しい、お床しい音信を聞いた。……姥、私は参るよ。

姥　たまたま麓へお歩行が。

椿　もうお帰り遊ばしますか。

白雪　どこへ？……（と聞返す。）

姥　お住居へ。

白雪　何？

姥　夜叉ヶ池へでござりましょう。

白雪　あれ、お前は何を言う……私の行くのは剣ヶ峰だよ。

一同　剣ヶ峰へ、とおっしゃりまするとな？

白雪　聞かずと大事ないものを――千蛇ヶ池とは知れた事――このおふみの許へさ。（と巻戻し懐中に納めて抱く。）

姥　（居直り）また……我儘を仰せられます。お前様、ここに鐘がござります。

白雪　む、（と眦をあげて、鐘楼を屹と見る。）

姥　お忘れはなさりますまい。山ながら、川ながら、御前様が、お座をお移しなさりますれば、幾万、何千の生類の生命を絶たねばなりませぬ。剣ヶ峰千蛇ヶ池の、あの御方様とても同じ事、ここへお運びとなりますと、白山谷は湖になりますゆえ、そのために彼方からも御越の儀は叶いませぬ。――姥はじめ胸を痛めます。……おいとしい事なれども、是非ない事にござります。

白雪　そんな、理窟を云って……姥、お前は人間の味方かい。

姥　へへ、（嘲笑い）尾のない猿ども、誰がかばいだていたしましょう。……憎ければとて、浅ましければとて、気障なればとて、たとい仇敵なればと申して、約束はかえられませぬ、誓を破っては相成りませぬ。

白雪　誓盟は、誰がしたえ。

姥　御先祖代々、近くは、両、親御様まで、第一お前様に御遺言ではございませぬか。

白雪　知っています。（とつんとひぞる。）

姥　もし、お前様、その浅ましい人間でさえ、約束を堅く守って、五百年、七百年、盟約を忘れぬではござりませぬか。盟約を忘れませねばこそ、朝六つ暮六つ丑満つ、と三度の鐘を絶しませぬ。この鐘の鳴りますうちは、村里を水の底には沈められぬのでござります。

白雪　ええ、怨めしい……この鐘さえなかったら、（と熟と視て、すらりと立直り）衆に、こへ来いとお言い。

椿　（立って一方を呼ぶ。）召します。姫様が召しますよ。

鯉七　（立上がり一方を）やあ、いずれも早く。（と呼ぶ。）

眷属ばらばらと左右に居流る。一同得ものを持てり。扮装おもいおもい、鎧を着たるもあり、髑髏を頭に頂くもあり、百鬼夜行の体なるべし。

虎杖　虎杖入道。

鯖江　鯖江ノ太郎。

鯖波　鯖波ノ次郎。
　この両個、「兄弟のもの。」と同音に名告る。
塚　十三塚の骨寄鬼。
蟹五郎　藪沢のお関守は既に先刻より。
椿　そのほか、夥多の道陸神たち、こだまずだま、魑魅、魍魎。
　影法師、おなじ姿のもの夥多あり。目も鼻もなく、あたまからただ灰色の布を被る。
影法師　影法師も交りまして。
　とこの名のる時、ちらちらと遠近に陰火燃ゆ。これよりして明滅す。
鯉七　身内の面々、一同参り合せました。
鯰入　憚りながら法師もこれに。……
白雪　おお、遠い路を、大儀。すぐにお返事を上げましょうね、そのために皆を呼びましたよ。
姥　や、彼方へお返事につきまして、いずれもを召しました？――仰せつけられまする儀は？
白雪　姥、どう思うても私は行く。剣ヶ峰へ行かねばならぬ。鐘さえなくば盟約もあるまい…
姥　…皆が、あの鐘、取って落して、微塵になるまで砕いておしまい。
　ええええ仰せなればと云うて、いずれも必ずお動きあるな。（眼を光らし、姫を瞻めて）
　まだそのようなわやくをおっしゃる。……身うちの衆をお召出し、お言葉がござりましては、わやくが、わやくになりませぬ。天の神々、きこえも可恐じゃ。……数の人間の生命を断つ

事、きっとおたしなみなさりませい。

白雪　人の生命のどうなろうと、それを私が知る事か！……恋には我身の生命も要らぬ。……

姥、堪忍して行かしておくれ。

姥　ああ、お最惜い。が、なりますまい。……もう多年御辛抱なさりますと、三十年、五十年とは申しますまい。今の世は仏の末法、聖の澆季、盟誓も約束も最早や忘れておりまする。やッと信仰を繋ぎますのも、あの鐘を、鳥の啄いた蔓葛で釣しましたようなもの、鎖も絆も切れますのは、まのあたりでござります。それまでお堪えなさりまし。

白雪　あんな気の長い事ばかり。あこがれ慕う心には、冥土の関を据えたとて、夜のあくるのも待たりょうか。可し、可し、衆が肯かずば私が自分で。（と気が入る。）

椿　あれ、お姫様。

姥　これは何となされます……取棄てて大事ない鐘なら、お前様のお手は待たぬ……身内に仰せまでもない。何、唐銅の八千貫、こう痩せさらぼえた姥が腕でも、指で挟んで棄てましょうが、重いは義理でござりまするもの。

白雪　義理や掟は、人間の勝手ずく、我と我が身をいましめの縄よ。……鬼、畜生、夜叉、悪鬼、毒蛇と言わるる私が身に、袖とて、褄とて、恋路を塞いで、遮る雲の一重もない！……先祖は先祖よ、親は親、お約束なり、盟誓なり、それは都合で遊ばした。人間とても年が経てば、ないがしろにする約束を、一呼吸早く私が破るに、何に憚る事がある！　ああ、恋し

い人のふみを抱いて、私は心も悩乱した、姥、許して！

姥　成程、お気が乱れましたな。朝六つ暮六つただ一度、今宵この丑満一つも、人間が怠れば、その時こそは瞬く間も待ちませぬ。お前様を、この姥がおぶい申して、お靴に雲もつけますまい。人は死のうと、溺れようと、峰は崩れよ、麓は埋れよ。剣ヶ峰まで、ただ一飛び。……この鐘を撞く間に、盟誓をお破り遊ばすと、諸神、諸仏が即座のお祟り、それを何となされます！

鯉七　当国には、板取、帰、九頭竜の流を合せて、日野川の大河。

蟹五郎　美濃の国には、名だたる揖斐川。

姥　二個の川の御支配遊ばす。

椿　百万石のお姫様。

姥　我ままは……

一同　相成りませぬ。

姥　お身体。

一同　大事にござります。

白雪　ええ、煩いな、お前たち。義理も仁義も心得て、長生したくば勝手におし。……生命のために恋は棄てない。お退き、お退き。

一同、入乱れて、遮り留むるを、振払い、掻い潜って、果は真中に取籠められる。

お退きというに、え……

とじれて、鉄杖を抜けば、白銀の色、月に輝き、一同は、はッと退く。姫、するすると寄り、颯と石段を駈上り、柱に縋って屹と鐘を――

諸神、諸仏は知らぬ事、天の御罰を蒙っても、白雪の身よ、朝日影に、情の水に溶くるは嬉しい。五体は粉に砕けようと、八裂にされようと、恋しい人を血に染めて、燃えあこがるる魂は、幽な蛍の光となっても、剣ヶ峰へ飛ばいでおこうか。

と晃然とかざす鉄杖輝く……時に、月夜を遥に、唄の声す。

＝＝ねんねんよ、おころりよ、ねんねの守はどこへいた、山を越えて里へ行た、里の土産に何貰うた、でんでん太鼓に笙の笛＝＝

白雪　（じっと聞いて、聞惚れて、火焔の袂たよたよとなる。やがて石段の下を呼んで）姥、姥、あの声は？……

姥　社の百合でござります。

白雪　おお、美しいお百合さんか、何をしているのだろうね。

姥　恋人の晃の留守に、人形を抱きまして、心遣りに、子守唄をうたいまする。

白雪　恋しい人と分れている時は、うたを唄えば紛れるものかえ。

姥　おおせの通りでござります。

一同　姫様、遊ばして御覧じませぬか。

白雪　思いせまって、つい忘れた。……私がこの村を沈めたら、美しい人の生命もあるまい。鐘を撞けば仇だけれども、（と石段を静に下りつつ）この家の二人は、嫉しいが、羨しい。

姥、おとなしゅうして、あやかろうな。

姥　（はらはらと落涙して）お嬉しゅう存じまする。

白雪　（椿に）お前も唄うかい。

椿　はい、いろいろのを存じております。

鯉七　いや、お腰元衆、いろいろ知ったは結構だが、近ごろはやる＝＝池の鯉よ、緋鯉よ、早く出て麩を食え＝＝なぞと、馬鹿にしたようなのはお唄いなさるな、失礼千万、御機嫌を損じよう。

椿　まあ……お前さんが、身勝手な。

一同　（どっと笑う。）――

白雪　人形抱いて、私も唄おう……剣ヶ峰のおつかい。

鯰入　はあ、はあ、はッ。

白雪　お返事を上げよう……一所に――椿や、文箱をお預り。――衆も御苦労であった。

一同敬う。＝でんでん太鼓に笙の笛、起上り小法師に風車＝＝と唄うを聞きつつ、左右に分れて、おいおいに一同入る。陰火全く消ゆ。

月あかりのみ。遠くに犬吠え、近く五位鷺啼く。

お百合、いきを切って、褄もはらはらと遁げ帰り、小家の内に駈入り、隠る。あとより、村長畑上嘉伝次、村の有志権藤管八、小学校教員斎田初雄、村のものともに追掛け出づ。一方より、神官代理鹿見宅膳、小力士、小烏風呂助と、前後に村のもの五人ばかり、烏帽子、素袍、雑式、仕丁の扮装にて、一頭の真黒き大牛を率いて出づ。牛の手綱は、小力士これを取る。

村一　内へ隠れただ、内へ隠れただ。
村二　真暗だあ。
初雄　灯を消したって夏の虫だに。
管八　踏込んで引摺出せ。

村のもの四五人、ばらばらと跳込む。内に、あれあれと言う声。雨戸ばらばらとはずる。真中に屹となり——左右を支えて、

百合　何をおしだ、人の内へ。
管八　人の内も我が内もあるものかい。鹿見一郡六ヶ村。
初雄　焼土になろう、野原に焦げようという場合であるです。
宅膳　（ずっと出で）こりゃ、お百合、見苦しい、何をざわつく。唯今も、途中で言聞かした通りじゃ。汝に白羽の矢が立ったで、否応はないわ。六ヶ村の水切れじゃ。米ならば五万石、八千人のために、雨乞の犠牲になりましょう！　小児のうちから知ってもおろうが、絶体絶

命の旱の時には、村第一の美女を取って裸体に剥き……

百合　ええ。（と震える。）

宅膳　黒牛の背に、鞍置かず、荒縄に縛める。や、もっとも神妙に覚悟して乗って行けば縛るには及ばんてさ。……すなわち、草を分けて山の腹に引上せ、夜叉ヶ池の竜神に、この犠牲を奉るじゃ。が、生命は取らぬ。さるかわり、背に裸身の美女を乗せたまま、池のほとりで牛を屠って、角ある頭と、尾を添えて、これを供える。……肉は取って、村一同冷酒を飲んで啖えば、一天たちまち墨を流して、三日の雨が降灌ぐ。田も畠も蘇生るとあるわい。昔から一度もその験のない事はない。お百合、それだけの事じゃ。我慢して、村長閣下の前につけても御奉公申上げい。さあ、立とう、立ちましょう。

百合　叔父さん、何にも申しません、どうぞ、あの、晃さん、旦那様のお帰りまでお待ちなすって下さいまし。もし、皆さん、堪忍して下さいまし。……手を合せて拝みます。そ、そんな事が、まあ、私に……

管八　何だとう？

初雄　貴女、お百合さん、何ですか。

百合　叔父さん、後生でございます……晃さんの帰りますまで。

宅膳　またしても旦那様じゃ。晃、晃と呆れた奴めが。これ、潮の満干、月の数……今日の今夜の丑満は過されぬ。立ちましょう、立ちましょう。

管八　言うことを肯かんと縛り上げるぞ。
嘉伝次　村、郡のためじゃ、是非がない。これ、はい、気の毒なものじゃわい。
管八　お神官、こりゃいかんでえ？
宅膳　引立てて可うござる。
管八　来い、それ。
　と村のもの取込むる。百合遁げ迷う。
風呂助　埒あかんのう。私にまかせたが可うござんす。
　とのさばり掛り、手もなく抱すくめて掴み行く。仕丁手伝い、牛の背に仰けざまに置く。
百合　ああれ。（と悶ゆる。）
　胴にまわし、ぐるぐると縄を捲く。お百合背を捻じて面を伏す。黒髪颯と乱れて長く牛の鰭爪に落つ。
嘉伝次　宅膳どん、こりゃ、きものを着ていて可いかい。
宅膳　はあ、いずれ、社の森へ参って、式のごとく本支度に及びまするて。社務所には、既に、近頃このあたりの大地主になれらましたる代議士閣下をはじめ、お歴々衆、村民一同の事をお憂慮なされて、雨乞の模様を御見物にお揃いでござりますてな。
嘉伝次　その事じゃっけね。
初雄　皆、急ぐです。

管八　諸君努力せよかね、はははは。

一同、どやどやと行きかかる。

晃　（衝と来り、前途に立って、屹と見るより、仕丁を左右へ払いのけ、はた、と睨んで、牛の鼻頭を取って向け、手縄を、ぐい、と緊めて、ずかずか我家の前。腰なる鎌を抜くや否や、無言のまま、お百合のいましめの縄をふッと切る。）

百合　（一目見て）おお晃さん、（ところげ落ち、晃のうしろに身をかくして、帯の腰に取縋り）旦那様、いい処へ。貴下。どうして、まあ、よく、まあ、早う帰って下さいました、ねえ。

晃　（百合を背後に庇い、利鎌を逆手に、大勢を睨めつけながら、落着いたる声にて）ああ、夜叉ヶ池へ――山路、三の一ばかり上った処で、峰裏幽に、遠く池ある処と思うあたりで、小児をあやす、守唄の声が聞えた。……唄の声がこの月に、白玉の露を繋いで、蓬の草も綾を織って、目に蒼く映ったと思え。……伴侶が非常に感に打たれた。――山沢には三歳になる小児がある。……里心が出て堪えられん。月の夜路に深山路かけて、知らない他国に徜※うことはまた、来る年の首途にしよう。帰り風が颯と吹く、と身体も寒くなったと云う。私もしきりに胸騒ぎがする。すぐに引返して帰ったんだよ。（と穏に、百合に向って言い果てると、すッと立って、瓢を逆に、月を仰いで、ごッと飲む。）

百合、のび上って、晃が紐を押え頸に掛けたる小笠を取り、瓢を引く。晃はなすを、受け

取って框におく。すぐに、鎌を取ろうとする。晃、手を振って放さず、お百合、しかとその晃の鎌を持つ手に縋りいる。

晃　帰れ、君たち ア何をしている。

初雄　更めて断るですがね、君、お気の毒だけれども、もう、村を立去ってくれたまえ。

晃　俺をこの村に置かんと云うのか。

初雄　しかりです。——御承知でもあるでしょう、また御承知がなければ、恐らく白痴と言わんけりやならんですが、この旱です、旱魃です。……一滴の雨といえども、千金、むしろ万金の場合にですな。君が迷信さるる処のその鐘はです。一度でも鳴らさない時はすなわちその、村が湖になると云うです。湖になる……結構ですな。望む処である、です、から、して、からに、そのすなわちです。今夜からしてお撞きなさらない事にしたいのです。鐘を撞かん事になってみる日になってみると、いたしてから、その、鐘を撞くための君はですな、名は権助と云うかどうかは分からんですが、ええん！

村二三　ひやひや。（と云う。）

村四五　撞木野郎、丸太棒。（と怒鳴る。）

初雄　えへん、君はこの村において、肥料の糟にもならない、更に、あえて、しかしてその、いささかも用のない人です。故にです、故にですな、我々一統が、鐘を、お撞きになるのを、お断りを、しますと同時に、村を、お立ち去りの事を宣告するのであるです。

村二三　そうだ、そうだとも。

晃　望む処だ。……鐘を守るとも守るまいとも、勝手にしろと言わるるから、俺には約束がある……義に依て守っていたんだ。鳴らすなと言うに、誰がすき好んで鐘を撞くか。勿論、即時にここを去る。

村四五　出て行け、出て行け。（と異口同音。）

晃　お百合行こう。――（そのいそいそ見繕いするを見て）支度が要るか、跣足で来い。茨の路は負って通る。（と手を引く。）

お百合その袖に庇われて、大勢の前を行く。――忍んで様子を見たる、学円、この時密とその姿を顕す。

管八　（悪く沈んだ声して）おいおい、おい待て。

晃　（構わず、つかつかと行く。）

管八　待て、こら！

晃　何だ。（と衝と返す。）

管八　汝、村のものは置いて行け。

晃　塵ひとつ葉も持っちゃ行かんよ。

管八　その婦は村のものだ。一所に連れて行く事は出来ないのだ。

晃　いや、この百合は俺の家内だ。

嘉伝次　黙りなさい。村のものじゃわい。

晃　どこのものでも差支えん、百合は来たいから一所に来る……留りたければ留るんだ。それ見ろ、萩原に縋って離れやせん。（微笑して）置いて行けば百合は死のう……人は、心のままに活きねばならない。お前たちどもに分るものか。さあ、行こう。

宅膳　（のしと進み）これこれ若いもの、無分別はためにならんぞ。……私が姪は、ただこの村のものばかりではない。一郡六ヶ村、八千の人の生命じゃ、雨乞の犠牲にしてな。それじゃに、……その犠牲の女を連れて行くのは、八千の人の生命を、お主が奪取って行くも同然。百合を置いて行かん事には、ここは一足も通されんわ。百合は八千の人の生命じゃが。……さあ、どうじゃい。

学円　しばらく、（声を掛け、お百合を中に晃と立並ぶ。）その返答は、萩原からはしにくかろう。代って私が言う。——いかにも、お百合さんは村の生命じゃ。それなればこそ、華胄の公子、三男ではあるが、伯爵の萩原が、ただ、一人の美しさのために、一代鐘を守るではないか——既に、この人を手籠めにして、牛の背に縄目の恥辱を与えた諸君に、論は無益と思うけれども、衆人環り視る中において、淑女の衣を奪うて、月夜を引廻すに到っては、主、親を殺した五逆罪の極悪人を罪するにも、洋の東西にいまだかつてためしを聞かんぞ！

そりゃあるいは雨も降ろう、黒雲も湧き起ろうが、それは、惨憺たる黒牛の背の犠牲を見るに忍びないで、天道が泣かるるのじゃ。月が面を蔽うのじゃ。天を泣かせ、光を隠して、そ

れで諸君は活きらるるか。稲は活きても人は餓える、水は湧いても人は渇える。……無法な事を仕出して、諸君が萩原夫婦を追うて、鐘を撞く約束を怠って、万一、地が泥海になったらどうする！　六ヶ村八千と言わるるか、その多くの生命は、諸君が自ら失うのじゃ。同じ迷信と言うなら言え。夫婦仲睦じく、一生埋木となるまでも、鐘楼を守るにおいては、自分も心を傷けず、何等世間に害がない。

管八　黙れ、煩い。汝が勝手な事を言うな。

初雄　一体君は何ものですか。

学円　私か、私は萩原の親友じゃ。

宅膳　藪から坊主が何を吐す。

学円　いかにも坊主じゃ、本願寺派の坊主で、そして、文学士、京都大学の教授じゃ。山沢学円と云うものです。名告るのも恥入りますが、この国は真宗門徒信仰の淵源地じゃ。諸君のなかには同じ宗門のよしみで、同情を下さる方もあろうかと思うて云います。（教員に）君は学校の先生か、同一教育家じゃ。他人でない、扱うてくれたまえ。（神官に）貴方も教えの道は御親類。（村長に）村長さんの声名にもお縋り申す。……（力士に）な、天下の力士は侠客じゃ、男立と見受けました。……何分願います、雨乞の犠牲はお許しを頼む。

これがために一同しばらくためらう。……代議士穴隈鉱蔵、葉巻をくゆらしながら、悠々と出づ。

鉱蔵　其奴等騙賊じゃ。また、騙賊でのうても、華族が何だ、学者が何だ、糧をどうする！……命をどうする？……万事俺が引受けた。遣れ、汝等、裸にしようが、骨を抜こうが、女郎一人と、八千の民、誰か鼎の軽重を論ぜんやじゃ。雨乞を断行せい。力士真先に、一同ばらりと立懸る。

学円　私を縛れ、（と上衣を脱ぎ棄て）かほど云うても肯入れないなら止むを得ん、私を縛れ、牛にのせい。

晃　（からりと鎌を棄て）いや、身代りなら俺を縛れ。さあ、八裂にしろ、俺は辞せん。――牛に乗せて夜叉ヶ池に連れて行け。犠牲によって、降らせる雨なら、俺が竜神に談判してやる。

百合　あれ、晃さん、お客様、私が行きます、私を遣って下さいまし。

晃　ならん、生命に掛けても女房は売らん、竜神が何だ、八千人がどうしたと！　神にも仏にも恋は売らん。お前が得心で、納得して、好んですると云っても留めるんだ。

鉱蔵　（ふわふわと軽く詰め寄り、コツコツと杖を叩いて）血迷うな！　たわけも可い加減にしろ、女も女だ。湯屋へはどうして入る？……うむ、馬鹿が！（と高笑いして）君たち、おい、いやしくも国のためには、妻子を刺殺して、戦争に出るというが、男児たるものの本分じゃ。且つ我が国の精神じゃ、すなわち武士道じゃ。人を救い、村を救うは、国家のために尽すのじゃ。我が国のために尽すのじゃ。国のために尽すのに、一晩嫣々を牛にのせるのが、

さほどまで情ないか。洟垂しが、俺は料簡が広いから可いが、気の早いものは国賊だと思うぞ、汝。俺なぞは、鉱蔵は、村はもとよりここに居るただこの人民蒼生のためというにも、何時でも生命を棄てるぞ。

時に村人は敬礼し、村長は頤を撫で、有志は得意を表す。

晃　死ね！（と云うまま落したる利鎌を取ってきっと突つく。）

鉱蔵　わあ。（と思わず退る。）

晃　死ね、死ね、死ね、民のために汝死ね。見事に死んだら、俺も死んで、それから百合を渡してやる。死ね、死ないか。

とじりりと寄るたび、鉱蔵ひょこひょこと退る。お百合、晃の手に取縋ると、縋られた手を震わしながら、

し、しからずんば決闘せい。

一同その詰寄るを、わッわと遮り留む。

傍へ寄るな、口が臭いや、こいつらも！　汝等は、その成金に買われたな。これ、昔も同じ事があった。白雪、白雪という、この里の処女だ。権勢と迫害で、可厭がるものを無理に捉えて、裸体を牛に縛めて、夜叉ヶ池へ追上せた。……処女は、口惜しさ、恥かしさ、無念さに、生きて里へ帰るまい。其方も、……其方も……追っては屠らるる。同じ生命を、我に与えよ、と鼻頭を撫でて牛に言い含め、終夜芝を刈りためたを、その牛の背に山に積んで、

石を合せて火を放つと、鞭を当てるまでもない。白い手を挙げ、衝とさして、麓の里を教うるや否や、牛は雷のごとく舞下って、片端から村を焼いた。……麓にぱっと塵のような赤い焔が立つのを見て、笑を含んで、白雪は夜叉ヶ池に身を沈めたというのを聞かぬか。忘れたか。汝等。おれたちに指でも指してみろ、雨は降らいで、鹿見村は焔になろう。不埒な奴等だ。

鉱蔵　世迷言を饒舌るな二才。村は今既に旱の焔に焼けておる。それがために雨乞するのじゃ。やあ衆、手ぬるい、遣れ遣れ。（いずれも猶予するを見て）埒明かんな、伝吉ども来い。

（と喚く。）

博徒伝吉、威の長ドスをひらめかし、乾児、得ものを振って出づ。

伝吉　畳んでしまえ、畳んでしまえ。

乾児　合点だ。

晃　山沢、危いぞ。

とお百合を抱くようにして三人鐘楼に駈上る。学円は奥に、上り口に晃、お百合、と互に楯にならんと争う。やがて押退けて、晃、すっくと立ち、鎌を翳す。博徒、衆ともに下より取巻く。お百合、振上げたる晃の手に縋る。

一同　遣れ遣れ、遣っちまえ、遣っちまえ。

学円　言語道断、いまだかつて、かかる、頑冥暴虐の民を知らん！　天に、――天に銀河白

し、滝となって、落ちて来い。（合掌す。）

晃　大事な身体だ、山沢は遁げい、遁げい。

と呼ばわりながら、真前に石段を上れる伝吉と、二打三打、稲妻のごとく、チャリリと合す。

伝吉退く。時に礫をなげうつものあり。

晃　（額に傷き血を圧えて）あッ。（と鎌を取落す。）

百合　（サソクにその鎌を拾い）皆さん、私が死にます、言分はござんすまい。（と云うより早く胸さきを、かッしと切る。）

晃　しまった！（と鎌を捩取る。）

百合　晃さん――御無事で――晃さん。（とがっくり落入る。）

一同色沮みて茫然たり。

晃　一人は遣らん！　茨の道は負って通る。冥土で待てよ。（と立直る。お百合を抱ける、学円と面を見合せ）何時だ。（と極めて冷静に聞く。）

学円　（沈着に時計を透かして）二時三分。

晃　むむ、夜ごとに見れば星でも了る……ちょうど丑満……そうだろう。（と昂然として鐘を凝視し）山沢、僕はこの鐘を撞くまいと思う。どうだ。

学円　（沈思の後）うむ、打つな、お百合さんのために、打つな。

晃　（鎌を上げ、はた、と切る。どうと撞木落つ。）

途端にもの凄き響きあり。――地震だ。――山鳴だ。――夜叉ヶ池の上を見い。夜叉ヶ池の上を見い。夜叉ヶ池の上を見い。真暗な雲が出た、――と叫び呼わる程こそあれ、閃電来り、瞬く間も歇まず。衆は立つ足もなくあわて惑う、牛あれて一蹴りに駈け散らして飛び行く。

鉱蔵　鐘を、鐘を――

嘉伝次　助けて下され、鐘を撞いて下されのう。

宅膳　救わせたまえ。助けたまえ。

と逃げまわりつつ、絶叫す。天地晦冥。よろぼい上るもの二三人石段に這いかかる。

晃、切払い、追い落し、冷々然として、峰の方に向って、学円と二人彫像のごとく立ちつつあり。

晃　波だ。

と云う時、学円ハタと俯伏しになると同時に、晃、咽喉を斬って、うつぶし倒る。

白雪。一際烈しきひかりものの中に、一たび、小屋の屋根に立顕れ、たちまち真暗に消ゆ。再び凄じき電に、鐘楼に来り、すっくと立ち、鉄杖を丁と振って、下より空さまに、鐘に手を掛く。鐘ゆらゆらとなって傾く。

村一同昏迷し、惑乱するや、万年姥、諸眷属とともに立ちかかって、一人も余さず尽く屠

り殺す。――

白雪　姥、嬉しいな。

一同　お姫様。（と諸声凄し。）

白雪　人間は？

姥　皆、魚に。早や泳いでおります。田螺、鰌も見えまする。

一同　（哄と笑う）ははははは。

白雪　この新しい鐘ヶ淵は、御夫婦の住居にしよう。皆おいで。私は剣ヶ峰へ行くよ。……もうゆきかよいは思いのまま。お百合さん、お百合さん、一所に唄をうたいましょうね。

たちまちまた暗し。既にして巨鐘水にあり。晃、お百合と二人、晃は、竜頭に頬杖つき、お百合は下に、水に裳をひいて、うしろに反らして手を支き、打仰いで、熟と顔を見合せ莞爾と笑む。

時に月の光煌々たり。

学円、高く一人鐘楼に佇み、水に臨んで、一揖し、合掌す。

月いよいよ明なり。

（――幕）

大正二（一九一三）年三月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成7」ちくま文庫、筑摩書房
　1995（平成7）年12月4日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　巻二十五」岩波書店
　1942（昭和17）年8月31日
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※底本の編者による脚注は省略しました。
入力：門田裕志
校正：染川隆俊
2002年2月22日公開
2015年4月17日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜叉ヶ池

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/